

【背景・目的】健康日本 21 において成人歯科では定期健診の受診率 30%以上、歯間清掃器具の使用率 50%以上など目標値を定め、健康増進法では「国民は健康増進に努めなければならない」としている。このような中、人々の保健行動と歯の健康に対する考え方はどのような関連があるのだろうか。歯科医療の専門家として、人々がどのように考え、保健行動を選択しているのかを知ることは、今後の取り組みを考える上で必要であると考え、関連性を調査した。

【調査 1：方法】質問紙調査では「日本版主観的健康統制感尺度」の 5 因子のうち「自己」「専門家」「運・偶然」の 3 因子を採用した。さらに独自に質問項目や保健行動の実施状況など合計 76 の質問を用意し、オンラインシステム REAS を使い実施した。協力者は 86 名(平均年齢 43.0 歳、 $SD=9.1$)、男性 31 名、女性 55 名であった。

【調査 1：結果】質問項目中 25 項目において因子分析(最尤法、バリマックス回転)をおこなった。その結果、因子負荷量 0.40 以上を基準とする 21 項目を選出した。また初期固有値の変化(4.897、3.180、2.548、1.551、1.368、1.004)から 6 因子を抽出し、「時の運」「専門家依存」「自己努力」「実現可能性」「重要度」「必要性」と命名した。この因子と五つの保健行動の相関係数を求めたところ、最も関係があると思われた「自己努力」は全ての保健行動と有意な相関がみられなかったが、「実現可能性」は全てにおいて有意であった(境目磨き $r=.25$, $p<.05$ 、セルフチェック $r=.29$, $p<.01$ 、歯間清掃器具 $r=.25$, $p<.05$ 、定期健診 $r=.45$, $p<.01$ 、甘味料摂取 $r=.45$, $p<.01$) (図 1)。

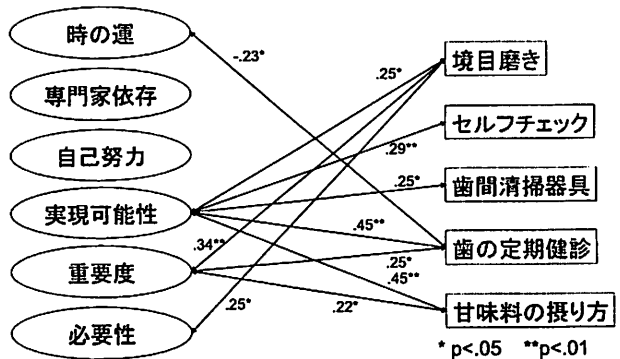


図 1 因子と保健行動の相関図

【調査 2：方法】調査 2 では調査 1 の量的調査を補完するために質的調査を実施した。A 大学通信過程に在籍中の社会人大学生 7 名(平均年齢 46.4 歳、 $SD=6.28$)に半構造化面接を実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)により分析した。

【調査 2：結果】GTA の結果、276 のデータにラベル化され、「定期健診」の現象は 16 のカテゴリーから成り、「口腔内清掃」の現象は 20 のカテゴリーから生成された。

【考察】人々は潜在的に健康でありたいと願っているが、歯の健康のために生活をしているわけではなく、実現可能な範囲で保健行動を実施している。また、望ましいとされる保健行動を獲得するには、まずその行動を体験し、各個人が行動変容の選択を見極める過程を経ていることが示された。

【結論】本研究により人々は、歯の健康について考え保健行動をおこなっており、その行動獲得には学習の機会が介在していることが示唆された。今後、さらに分析をすすめ、理論的飽和を目指したい。

● 歯科関係者および保健行動を研究している方の参加をお願いします。

(連絡先)竹本 慈：早稲田大学人間科学部
E-mail: hacunamatata@suou.waseda.jp